



石巻市の門脇小学校。昨年の紅白で長渕剛が歌った場所。校舎の外は片付いていたが、教室の中はそのままの状態だった。全国から見に来ていた。



撤去しないで下さいと書いてあった美容室の立て看板が印象的だった。



心のケアをする石巻医療圏 健康・生活復興協議会のメンバーと看板。



津波のすごさを実感した南三陸町。杉の木の頂辺まで海水に浸かって枯れていた。最後まで避難を呼びかけ、亡くなった24歳の遠藤さんがいた建物。



南三陸町 昨年の3月17日の写真(右)と今回(左)の写真。1年以上経っているのにまだ屋根の上に高級車が残っていた海から1kmほどの建物。



本当に4階まで津波の被害に遭っている建物。横にはがれきが積まれて。



陸前高田市「幸福の黄色いハンカチ」の山田洋次監督が被災したファンの男性に贈ったもので柱には「希望よ永遠に」と。がれきは分別されて。



道の駅の横にあった冷蔵庫。がんばろう山田町の文字が印象的だった。



とても綺麗な三陸の海(右)と対照的な一面土台だけの津波被害の跡地。何事にも良い面と、悪い面がある。

「ゴールデンウィーク東北へ！」
5月3日から東北の被災地へ行ってきた。石巻・南三陸・気仙沼・陸前高田・大船渡・釜石と国道45号線を北上し八戸まで。
日頃言っているように自分の目で確かめるために。被災地はどこも同じ風景で、倒壊した建物はほぼ撤去され、がれきは集められて山積みになっていた。当時のすざましい様子とは違い、匂いもなく静かでも空虚な感じがした。
その日までの街を、家を、人を、日常を一瞬にして失った人たちの事を思うと、今ある一日、一日に、そして人との関係を大事にして生きることの大切さを実感する。生きているから苦しいことも、辛いことも、楽しいことも経験できる。そんな思いを強く持った。
中学生も高校生も6月は定期テストです。生きているからテストも受けられる。そんなふう

「安定志向?で過去最高」
今年の新入社員への意識調査で、「今の会社に一生勤めようと思ってる」と答えた割合が過去最高の60.1%に達した。日本生産性本部の調査。長引く就職難や経済の先行き不安を背景に、担当者は「厳しい就職活動をくりげり抜けた新入社員は、世相を敏感に感じとり、安定志向を強めている」としている。調査は「若者意識アンケート」で90年から毎年実施。今年3月下旬〜4月上旬に同本部が開いた新入社員研修の参加者を対象に、2089人から回答を得た。
「一生勤める」は昨年春の調査より5.7ポイント増え、最も低かった00年からは40ポイント近く増えた。「さっさと、チャンスがあれば、転職してもよい」と答えたのは26.6%で過去最低。昨年より3.8ポイント減、00年からは25ポイント近く減った。04年までは「転職」が「一生勤める」を大幅に上回って

いたが、06年に逆転し、差も開く傾向にある。社内出世より起業・独立を選ぶかどうか聞く、「起業・独立」は過去最低の12.5%だった。(5月28日朝日新聞)
「就活失敗し自殺する若者急増…」
4年で2.5倍に
就職活動の失敗を苦に自殺する10〜20歳代の若者が、急増している。07年から自殺原因を分析する警察庁によると、昨年は大学生など1500人が就活の悩みで自殺しており、07年の2.5倍に増えた。警察庁は、06年の自殺対策基本法施行を受け、翌07年から自殺者の原因を遺書や生前のメモなどから詳しく分析。10〜20歳代の自殺者で就活が原因と見なされたケースは、07年は60人だったが、08年には91人に急増。毎年、男性が8〜9割を占め、昨年は、特に学生が52人と07年の3.2倍に増えた。背景には雇用情勢の悪化がある。厚生労働省によると、大学生の就職率は08年4月には96.9%。同

9月のリーマンショックを経て、翌09年4月には95.7%へ低下。東日本震災の影響を受けた昨年4月、過去最低の91.0%へ落ち込んだ。(5月8日読売新聞)
この二つの記事は、現在の就職事情がいかに厳しいものであるかを如実に表している。今は運良く就職できたり、運悪く就職できなかったりするのではなく、初めから就職できる人種と就職できない人種とに分かれているのだと思う。
就職できない人種の人は、今現在、元気がなく、意欲がなく、コミュニケーション能力がなく、やらなければならないことができない。過保護に育つとそうなる。社会や企業に必要とされる訳がない。学力だけでは就職できなくなっている。
学力と人間力が必要である。今からやっておかなければ将来とても困ることになる。

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	休塾	土	金	木	水	火	月	日	水	火
			★美原定期テスト				★一〇〇〇分特講			★青陵定期テスト			★鳥取西二年宿泊研修							休塾			★富原二年宿泊研修			★青陵中修学旅行				
			★富原・共栄定期テスト				★一〇〇〇分特講			★鳥取西定期テスト											休塾					★高専定期テスト(5日)				
																										★湖陵定期テスト(5日)				

第1回漢字検定は7月13日(金)に実施します。

6月の予定

第30回「心に残る医療」体験記コンクールより

主催：日本医師会、読売新聞社

「生きていることの喜び」

辻 洋子さん 東京都町田市

「上の見本通り書けばいいのに、何で間違っ書くの!？」

漢字の宿題で急に変わった字を書くようになった息子。そして私の言うことを聞かず、落ち着きのなくなった息子のカイトをその当時私は毎日こんなふう怒っていました。「ちゃんとお母さんの話を聞いて！何度言えばわかるの？」私はいらだちと言いのない不安からつい手を出して怒ったこともありました。

それはカイトが小学校2年生の秋のことでした。それまでは幼稚園から始めたサッカーが大好きで、チームのみんなの先頭に立ち真面目に練習に取り組んでいた息子でした。負けず嫌いで何でも1番じゃないと気が済まない息子は、学校へも朝校門が開く前から待っていて、教室にはいつも1番に登校するのが日課でした。そのカイトが朝なかなか起きられなくなりました。3つ上の姉にも負けたくなくて九九もしっかり覚えていたのに、ある時から九九も必ず間違えるようになりました。そんなカイトの姿は私を混乱させ「私の育て方が悪いのだろうか、心の病気なんだろうか」とずっと自問自答していました。でもどうしていいかわからず、カイトを叱りながら解決の糸口を探して、私ももがいていました。

12月に入ると、サッカーの練習ではいつも攻撃的で友達にぶつかっていったのが、怯（おび）えて見ているようになりました。

そして1月に入り、上履きも履かずにふらふら歩いていると担任の先生から告げられ、そこに至って「これは脳の病気かもしれない…」と思い始めました。

そしてそこから、息子はどんどん重い症状に入っていました。トイレに行っても下着を脱ぐのを忘れて排便した時は、すでに予約をしていた検査も待ってられず、大病院に緊急で受診し、即入院となりました。

一ヶ月近くの検査の末、カイトはSSPEと診断されました。この病気は赤ちゃんの時に麻疹に罹った子（カイトは生後1ヶ月の時でした）が、その麻疹のウィルスが体のどこかに残っていて数年後に変異し、脳細胞を壊していく病気でした。深刻な病気の診断でしたが病名がわかった時はやっと出口が見つかったようで、なぜか気持ちが少しほっとしました。しかしそれはこれから襲ってくる病気との戦いの入り口でしかありませんでした。

治療に希望を持って入院した新しい病院で、カイトの体は1日1日衰えていきました。昨日はサッカーボールを蹴っていたのに、今日は蹴ることができなくなっている、そして次の日はよろけて転ぶ、そして次の日は…というように坂を転がるようにどんどん悪くなって行きました。明日に希望を持ちたいけれど、明日が来るのが怖くてしかたありませんでした。入院して1ヶ月半位の間に、歩けなくなり食べられなくなり、そしてとうとう夜中に強い筋緊張が起こり「お・か・あ・さ・ん」と苦しそうに一言言うとそれっきりもう話すこともできなくなりました。

高熱で寝たきりの状態になり、時々目を開けても瞬きもせず、眼球は上を向いたまま私を見ることはありませんでした。もうあの元気ががむしゃらにボールを追いかける息子は…と思うと、ベッドで寝ているカイトは別の子のようで、私は受け入れることができませんでした。

カイトが入院していた病院には院内学級があり、入院した翌日から授業を受ける事ができていました。最初の頃は歩いて病院内にある教室に通っていましたが、具合が悪くベッドから起きられない時はベッドサイドで先生が授業をしてくれていました。病状が悪化していく中で、いつも元気な声で話しかけて下さる先生方の優しさで、授業中は私もほっと心が安らぎました。

カイトが寝たきりの状態になり、私は『もうこの子は何もできない子なんだ』と思っていた時、授業にいらした先生がカイトに何かを尋ね、そして「あー、今カイト君、目をぱちぱちっとして答えてくれたね。」「あつ、今度は口をもぐってして答えてくれたんだね」とカイトに話しかけてくれたのでした。その言葉を聞いて、私はほっとしました。『そうなんだ、この子は生きてるんだ。そして今も一生懸命病気と戦っている…。あの負けず嫌いのカイトなんだ。ちゃんとこの子は頑張っているのに、どうして私は勝手に諦めているのだろう』と。

先生のあの時の言葉は、病気の息子を受け入れ、息子と一緒に前向きに生きていこうと思うきっかけとなりました。どんな重い障がいを持った子でも、先生方が一人の人格を持った子どもとして接して下さったことに、本当に感謝しています。

あれから4年たち、特別支援学校に通う今でも、息子は「学校」から生きる力を学んでいます。そして私は、息子が生きている喜びと幸せをずっと教えていただいています。

「こんぺい糖とおさげ髪」

加藤 政代さん 静岡県牧之原市

規則的なポンプ音とランプが点滅する装置。医師に呼ばれて入った脳外科のICUは、

立ち働くスタッフ以外全てが無機質だった。

紫色のうっ血点だらけの青白い顔をした五歳の娘は、管やコードに囲まれ、上半身裸でベッドに横たわっていた。我が身に起こっている現実なのにもかかわらず、私は妙に客観的に娘を眺めていた。

その2時間半前、私は道路で必死に助けを呼んでいた。側溝で脱輪して傾いた車と道路脇の低い石垣の間に挟まれた娘のあすみは、ひと泣きの後意識が途絶えた。

近所に駆け込んで一九番への通報を頼み、道行く車に助けを求めた。

数人の手を借りて娘を車の下から救出し、人工呼吸を始めた直後に救急車は到着した。通報から十二分が経過していた。救急隊員は車の中で心肺蘇生措置を試み続けたが、現場から十分のH総合病院に到着した時点では娘の心臓はまだ停止したままだった。

（この子はもうダメだ・・・）独身時代総合病院で事務員をしていた私は、十分以上の心肺停止がどういう事態なのか良く解（わか）っていた。頭の中で最悪のシナリオが巡り始めた。主人が病院に到着したのは三十分後だった。

すぐに主人だけが処置室へ呼ばれた。この時医師に、「心臓は僅かに動き始めたが、心肺停止の時間は二十五分以上。十分でも九九%助からない」と告げられたという。

その後私も中へ呼ばれ、先生の話聞いた。「子どもの生命力と新しい治療にかけてみようと思いますが、いかがですか？」問われても訳が解らない。「宜（よろ）しくお願いします」と頭を下げるしかなかった。

一九九七年。当時脳低温療法を行っている施設は全国でも極僅かだったそうだ。この病院でも初挑戦で、しかも幼児。資料を片手に手探り状態だったと後で知った。一時間以上経過し、五時頃ようやく主人と二人ICUへ案内された。

「体温を三二℃に下げ三日間保ちます。冬眠状態にして脳を休め、その後徐々に体温を戻します。この三日間が山でしょう」

立春から三週間。窓の外の晴れた空は薄茜（あかね）色なのに、室内は全てがモノクロに見えた。

山だと言われた三日間、素人目には何の変化も見られなかった。ICUでの面会は一人十分。一日はあまりに長く、私は仕事を始めた。娘にねだられて買った和紙の内裏雛（びな）のキット。本当は一緒に作るはずだった。

これが最後の雛祭りになるのかも――祈るためではなく、覚悟のための雛飾りだった。

三月二日。面会に行った私は小さなお雛様を枕元の棚に飾った。

看護師さんが娘の髪を梳（と）かしていた。頭の日辺（てっぺん）で丸めながら「凄（すご）く長い髪ですね。」と言った。娘の髪は腰近くまであった。「秋には七五三で結うつもりだったんです。」過去形で答えながら、（頭も洗えないし、切った方がいいのかな・・・）と考えていた。

三月三日、ハサミを用意して面会に行くと、前日までとは違う光景が目に入った。お雛様の横には色とりどりの小さなこんぺい糖がお供えしてあった。娘の長い髪は綺麗に三つ編みにされ、先端は見覚えの無い赤い苺（いちご）のゴムで結わえてあった。

動物柄のタオルを掛けて眠るあすみの顔が穏やかに見えた。

先生が来て「カワイイお雛様だねー。ひなまつりの歌、知ってるかい？」と笑った。

看護師さんは、「あすみちゃん、早く起きようね。食いしん坊のH先生にこんぺい糖食べられちゃうぞ」と言って頬をつついた。

皆が意識の無いあすみに笑顔で話しかけている事に初めて気づいた私だった。

（この人達はあすみが目覚める事を願って待っている。私が信じなくてどうするの？）

事故の日以後忘れていた涙がボロボロこぼれた。突然泣きだした私の背中を、看護師さんは黙ってさすってくれた。

翌日から私は笑顔で面会に行けるようになった。眠るあすみの傍らで絵本を読み、歌を唄った。既に復温が始まっており、日に日にあすみの顔色は鮮やかになっていった。

三月九日、あすみの意識は戻った。

全身麻痺（まひ）状態からの苦しいリハビリが始まった。あの日以来こんぺい糖は私達親子の元気の素になった。訓練の前には、こんぺい糖を1粒あげた。つらい時、淋（さび）しい時、チャレンジする時、こんぺい糖を口に放り込めば、どんな事も笑顔で頑張れた。

あれから十五年。あすみは二十歳になった。身体障害一級だが、家を離れ、車イスで県外の大学に通っている。

来年成人式を迎えるあすみのために、私はこんぺい糖のトンボ玉で帯飾りを作った。おさげ髪に苺の髪飾り、笑顔の晴れ着姿の写真を年賀状にして、お世話になった人達に送りたいと思っている。